

岡倉天心の自己認識と理想

—『東洋の目覚め』を中心に—

野中寛治（倫理研究所研究員）

はじめに

岡倉天心（幼名は角蔵、のち覚三、天心は号）は、明治維新の6年前（1862）に生まれ、大正2年（1913）52歳で生涯を終えている。明治という時代を駆け抜けていったように思える天心とは、いかなる人物で、何をなしたのだろうか。

これまでの天心に対する評価には、日本美術の価値を発見し世界に示した、近代日本画の確立を図り横山大観・下村観山・菱田春草らの日本画の巨匠たちを指導、育成した、日本の近代化に関する問題点を直感的に捉え示した、西洋文明の普遍性の不当な誇示に対して鋭い批判をなした、「アジアは一つ」と叫んだアジア主義者、国粹主義者であったなどがある。

天心の直系の孫である岡倉古志郎は、次のような「天心観」を記している。

… 天心はその一生をつうじて、みずからの身体で詩を書きつらねた詩人であり、しかも、この詩は八方破れの詩であった、というにつきる。いいかえれば、天心は色川大吉教授のいう「矛盾の塊り」であり、竹内好氏のいう「やたらと放射能をばらまく危険な思想家」である。

また天心の業績についても、古志郎は「美術行政官、在野美術運動指導者、国際美術交流の活動家、そしてその英文著作をつうじて欧米、インドなど国際的に一定の影響力を及ぼした思想家等々として、まことに多面的な仕事をした」と記している。これら天心の業績については、後で見ることにしたい。古志郎のいう天心の英文著作の主なものには、次の三作がある。

* 『東洋の理想』（42歳の明治36年、第一の英文著作としてロンドンで出版）

* 『日本の目覚め』（訳者によっては『日本の覚醒』。明治37年、第二の英文著作としてニューヨークで出版）

* 『茶の本』（明治39年、45歳で、第三の英文著作としてニューヨークで出版）

この他に、明治35年に執筆した英文草稿ノートの『東洋の目覚め』（訳者によっては『東洋の覚醒』）がある。

この草稿は、当時英国の領土であったインド滞在中に書いたもので、天心の死後発見された。その内容は、インド独立を戦う青年たちに覚醒を促す檄文ともいえるもので、アジア民族にアジアの自覚と誇りを訴えた天心の過激な言葉が、全編に満ちている。

小論では、『東洋の目覚め』を取り上げ、天心の思想を検討するとともに、現代において『東洋の目覚め』を読むことの意義について考えていきたい。

はじめに、天心の生い立ちからインド訪問までの事績を概観しておきたい。